The PHOTO JOURNAL

VOL.0009
2015年4月25日
無料

http://www.thephotojournal.org
Photo news stories and documentaries since 2015

©2015 Yuki Iwanami

受け取ったばかりの永吏可さんの卒業証書に見入る上野さんと貴保さん

シリーズ 福島

写真 文
岩波友紀

津波に奪われた娘の卒業 そして今日も息子を捜す

「2年生の永吏可を覚えていてくれて、みんなありがとう…」。娘の同級生にお礼を言う上野敬幸さん（42）の目から大粒の涙が零れ落ちた。3月、福島県南相馬市。小学校の卒業式のこの日、4年前に津波に命を奪われた長女の代わりに上野さん夫妻は次女の倖吏生ちゃん（3）とともに卒業証書を受け取った。「大きくなったみんなを見て、永吏可もこれくらい成長していたんだなって。何十年たっても今と同じ気持ちになるんだろうな…」。妻の貴保さん（38）の顔に笑みと涙が交錯した。

東日本大震災が起こったあの日、上野さんは同居する家族の父・喜久蔵さん、母・順子さん、長女・永吏可さん、長男・倖太郎ちゃんを津波で失い、父と息子はいまだに行方不明のままだ。月日が流れても悲しみはあの日と同じ。あれからどこに行ってもなにをしても思うのは、「どうしてこの場に永吏可と倖太郎がいないのか」。震災後、家族で年一回ほど行っていたディズニーランドに地元の子供たちを連れて行ったとき。蘇る思い出に心がしめつけられ、みんなと離れてふたりの名前を呼びながらひとりで歩き回っていた。

「倖吏生が一緒で助かった。ひとりで行ってたら耐えられなかったよ」。卒業式の朝、永吏可さんを思い自宅を出るまでに2度も泣いてしまった上野さん。持ち前の愛嬌で、授与式中も場を和やかにしてくれていたのは倖吏生ちゃんだった。この日だけでなく、今日までなんとか耐えてこられたのは彼女がいたからだと上野さんは強く感じている。その倖吏生ちゃんは4月、幼稚園の入園を迎えた。手に持つ手提げかばんなどは、入園を間近に控えていた当時3歳の倖太郎ちゃんのために用意したものだ。それを一度も使うことがなかった倖太郎ちゃんを、倖利生ちゃんは追い越してしまった。気持ちを置き去りに4年の歳月は確実に流れていた。仮設住宅暮らしをしていた震災半年後に生まれ、姉と兄の名から一字ずつもらった倖吏生ちゃん。新しい命が生まれたこの瞬間に上野さんが流した涙は、うれし泣きの涙ではなかったと聞いて驚いた。おじいちゃんも、おばあちゃんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんも、喜び祝福してくれるはずの家族がそこにはひとりもいない。「妹ができる」と、赤ちゃんを誰より楽しみにしていたのは永吏可さんだった。寂しくて悔しくて、とめどなく流れた涙だった。

上野さんにはやらなければならないことがある。いまだに見つかっていない息子を捜し出すことだ。地震発生時、勤務先から急いで原町区萱浜の自宅に戻り両親と倖太郎ちゃんの無事を確認し、勤務先に戻ったときに津波がきた。地元消防団での救助活動に向かった後、仕事中だった貴保さんとは再会できたが、避難所を回っても4人の姿はどこにもない。萱浜に戻り泥水に覆われた地で4人を捜し続けた。そして、ふたつの原発が爆発した。東京電力福島第一原発から約22キロの萱浜には、上野さんら消防団以外誰もいなくなった。「見捨てられた」と、今でもその思いが残る。津波と原発事故の二重の被害を受けた福島沿岸部の現実だった。1ヶ月以上たって来た自衛隊も2週間足らずで撤収。「本当に人がいなかった」という中、鳶口を手に消防団の仲間の力だけで探し出した40人にものぼる人たち。近所のよく知る人たちばかりだった。ひとりひとり抱き上げ、安置所まで運ぶ地獄の日々。順子さんと永吏可ちゃんは翌日遺体で見つかった。

入園式前に自宅で記念撮影をする上野さん一家。出かける前にはしゃぎすぎて疲れた顔の倖吏生ちゃんにふたりは苦笑い

倖太郎ちゃんに用意した幼稚園の制服の帽子は流されずに残った。
倖吏生ちゃんは永吏可さんと同じ黄色の運動帽をかぶって通園している

福島県大熊町の帰還困難区域で行方不明者の捜索をする上野さんと福興浜団。
「家族だけでなく、全ての人が見つかるまで続ける」

姉と兄の骨箱を抱く倖吏生ちゃん。
「帰ってこーい」と倖太郎ちゃんに語りかけた

黄色い花をつけた菜の花畑。巨大迷路を作り、ゴールデンウィークには訪れた
人たちに楽しんでもらう

「倖太郎が見つかったら死のう」。子供たちを守ってやれなかった自らを激しく責め、そう思いつめていた。自分が生きていることに意味があるとすれば倖太郎ちゃんを捜すことだけだった。しかし、捜しても捜しても見つからない日々が続いて1年ほど過ぎたあるときふとこんな思いが頭をよぎる。「そんな自分を見て、倖太郎はわざと見つからないようにしているんじゃないか」。やんちゃで活発な子。仕事中に通った自宅近くの道端でひとりで遊んでいるのを見かけ声をかけたときの、「ニカッ」と返した笑顔が今でも目に浮かぶ。自分の命には未練もないが、その息子に生かされてるなら生きている人間しか出来ないことをやり続けよう、そう思えるようになった。

消防団の仲間で続ける捜索にはやがてボランティアも加わり、「福興浜団」という団体が生まれた。138人が亡くなり、あたり一面荒野と化した萱浜地区。「何もなくなって、涙しかなかったこの場所に笑顔を取り戻したい」という思いから、今も続けている捜索に加えイルミネーションや打ち上げ花火、菜の花畑の迷路と活動を広げていった。すべての活動はみんなの笑顔のため。「生きている人たちが笑顔になることで、亡くなった人たちに安心してほしい」。

この春、永吏可さんと倖吏生ちゃんには「おめでとう」を言うことが出来た。倖太郎ちゃんは入園も入学も卒業も経験できなかった。自宅に置かれた倖太郎ちゃんの骨箱の中にはまだ本人がいない。この手で見つけて、入れてあげなければならない。助けられなかったことを謝り、抱きしめてやらなければならない。永吏可さんを抱きしめたように。

4月下旬、上野さん宅に車を走らせるとやがて一面茶褐色の中に鮮やかな菜の花の黄色が目に飛び込んでくる。枯れるほどに流した涙と福興浜団みんなで流した汗は、今年も子供たちの笑顔に変わるだろう。倖太郎ちゃんに生かされているこの命がある限り、亡くなったみんなと生きているみんなのために今年も花の種をまく。そして生きている限り抱き続ける自責の念を胸に、今日も海に向かう。

福島県南相馬市の海岸で倖太郎ちゃんを捜す上野さん

The PHOTO JOURNAL

VOL.000 9